

コロナ禍とエッセンシャル・ワーク

田中 史郎

コロナ禍にあって、エッセンシャル・ワーク（EW）が注目されてきました。世界中で外出自粛やロックダウンが余儀なくされましたが、EWには緊急事態下においても不可欠な仕事として、尊敬や感謝の念が込められています。それに明確な定義はありませんが、医療・介護・福祉・保育に携わる仕事は誰しも認めるどころ。こうした仕事に、かなりの割合で非正規労働者や女性が従事していることは周知のことです。残念ながら、賃金などの処遇が必ずしも良いとはいえません。雇用主や世間によりEWの「やりがい」が強調されることで、従事している労働者も低賃金や長時間労働を受け入れざるを得ない状況が指摘されています。「やりがい搾取」という言葉もあります。

ところで、こうしたEWの対極に位置しているのがブルシット・ジョブ（BJ）と呼ばれる仕事です。それは、D.グレーバー（酒井隆史・芳賀達彦・森田和樹、訳）『ブルシット・ジョブ』（岩波書店、2020年）によって命名されたもの。bullshitとは、戯言やデタラメなどの意味ですが、訳者はこれに「クソどうでもいい」という日本語（名訳）を与えました。著者はそれを「取り巻き、脅し屋、尻ぬぐい、書類穴埋め人、タスクマスター」など皮肉を込めて規定しています。これらの職は、場合によっては高給だが、本人でさえ実は無意味で不必要だと思っているとのことです。

こうした実態を見せつけられると、なんともいえない虚しさを覚えます。一方に多くのEWの低賃金が、他方にある種のBJの高給が存在しているのです。こうした状況にあってEWに真っ当な評価が与えられれば、それはコロナ禍での数少ない光明といえるのではないのでしょうか。

（『河北新報』2021年7月24日）